

日野町町民大学講座開講中!!

自らの教養を深め視野を広げ、より一層充実した心豊かで生きがいのある生活を送るための学習となるよう次の日程で日野町町民大学講座を開講しています。各開講日の前日までに申し込みいただければ参加可能ですので、皆さんぜひご参加ください。
※第1回は5月23日に終了しています。

第2回



6月13日(水) 19時30分～21時

わたむきホール虹ふれあいホール

●演題 アスリートの体と心をとケアする理学療法士の役割

●講師 久田 信志 さん

競馬共助会栗東診療所・理学療法士

久田さんは理学療法士として、春夏の甲子園大会にて高校球児のメデイカルサポートに参加され、その実績から昨年、清宮幸太郎や安田尚憲ら率いるU18日本代表チームに帯同しワールドベースボールカップで選手と共に戦われました。トップレベル選手の体調管理の難しさや、私たちが普段の生活の中で出来る膝、腰痛の簡単なケア、ストレッチ等のお話をお聞きます。

第3回



7月12日(木) 19時30分～21時

わたむきホール虹ふれあいホール

●演題 認知症は怖くない

～予防と治療、地域の関わり～

●講師 小河 秀郎 さん

公立甲賀病院神経内科部長

滋賀県の男性の平均寿命は81.78歳で全国1位、女性は87.57歳で全国4位です。2025年、団塊世代の方が75歳を迎えます。超高齢化社会の中で、認知症を発症する方も多くそのケアのあり方が課題となっています。小河先生からは日頃の現場の治療から、認知症の実態、原因と予防、治療について、地域の対応など幅広くお話いただきます。

講座受講料は1講座1,000円です。(3回以上受講される場合は3,000円が上限となります)

◆問い合わせ先 日野町立中央公民館(生涯学習課内) ☎0748-52-6566

感雑向綿

— 2018年6月 —

日野町長 藤澤 直広

毎朝、NHK朝ドラ「半分、青い。」を楽しみ見ています。デイスコ、マハラジャ、お立ち台、30年前の華やかな東京。岐阜出身の主人公

の友人の律と北海道出身の友達は「西北大学」1年生、ふるさと訛を封印し女友達とお付き合い、青春を「謳歌」しています。

主人公の榎野鈴愛は、漫画家の秋風羽織の事務所へ弟子入り。鈴愛は、小さい頃に病気で聞こえなくなった左耳のことをちょっぴり気にしながらも明るくて快活です。事務所には通称ボクテと呼ばれるアシスタントがいます。が「ゲイ」(同性愛者)です。障がいがあることや性的マイノリティの存在が「普通」に描かれています。ひとり一人に個性があり、人として尊重されることが大切です。

昭和22年3月に公布された教育基本法の前文には「個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期する」とあります。戦前の教育が個人の尊厳よりも国家に奉仕すること

が優先され、真理の追究よりも国家に有用なものが真理とされ、結果として軍国主義国家に陥った苦い歴史の反省の上に立っています。

先月、「滋賀九条の会」主催の「滋賀・憲法のつどい」で前文部科学事務次官の前川喜平氏の講演を聞くことができました。「この(日本国憲法)理想の実現は、根本において教育の力にまつべきもの」(前文)とありますが、前川氏は憲法と教育についての話を縦横無尽に広げられました。今、国会では加計学園の獣医学部新設が「首相案件」だったのではと注目されていますが「総理のご意向」であったと指摘したのが事務次官であった前川氏でした。首相秘書官や財務省の官僚の「あったことをなかつたことにする」発言に国民が辟易するなかで筋を通した前川氏は大いに光って見えます。

水田の早苗がすくすくと伸び、転作田の麦が黄金に輝いてきました。その上をスズメが自由に飛び交っています。のどかな風景です。自由であること、平和であること、「理想」の社会を実現するために力を合わせましょう。

温故知新

日野歴史探訪 はじまります

私たちの住む日野町には、52の大字があり、それぞれの地域が豊かな自然と歴史文化でいろいろられています。

温故知新では、町内各大字の歴史と代表的な文化財をシリーズで紹介していきます。

数窓の町並みなど、豊富な文化財が残されています。

大字村井

大字村井は日野地区の最も東に位置し、地名の由来は多くの住民が「群れ居た」土地であったためと言われています（『近江日野町志』）。

古代から中世初期の頃は、日野谷一帯に広がっていた日野牧の一部でした。16世紀の中頃、蒲生氏が中野城下の町人地として村井・大窪・松尾地先に「日野町」を形成し、多くの商職人が居住する都市として賑わいました。

江戸時代には日野村井町となり、日野椀・合葉などの地場産業が栄え、多くの日野商人を輩出しました。

村井には、日野祭の行われる馬見岡綿向神社や、蒲生氏の菩提寺で高田敬輔の雲龍図でも知られる信楽院をはじめとする社寺仏閣や、日野曳山（本町・新町）や棧

大字村井文書

大字村井に伝わる文化財の中で忘れてはならないのが、「大字村井文書」です。江戸・昭和戦前期の古文書・約2500点が残されており、地域の歴史を知ることが出来る貴重な史料となっています。

なかでも、江戸中後期の「御用留」の存在が注目されます。御用留とは、領主から伝達された触書や、住民が領主に差し出した嘆願書などを書きとめたものです。江戸時代の年貢や戸籍に関する行政事務は、村の庄屋に任されていますので、記録作成は庄屋の大切な任務だったのです。

幕末から明治初年にかけて村井の庄屋・戸長をつとめた辻六右衛門（辻六四文・十字墨溪）は、「過去を振り返り、将来を示すことが

はじまります

庄屋の職務」であると唱え、御用の整備に並々ならぬ執念を燃やしました。彼は、ほう大な古文書の中から必要な情報を選び出し、年代やテーマ別に分類、約80冊の簿冊にまとめ、地域の運営に役立ちました。

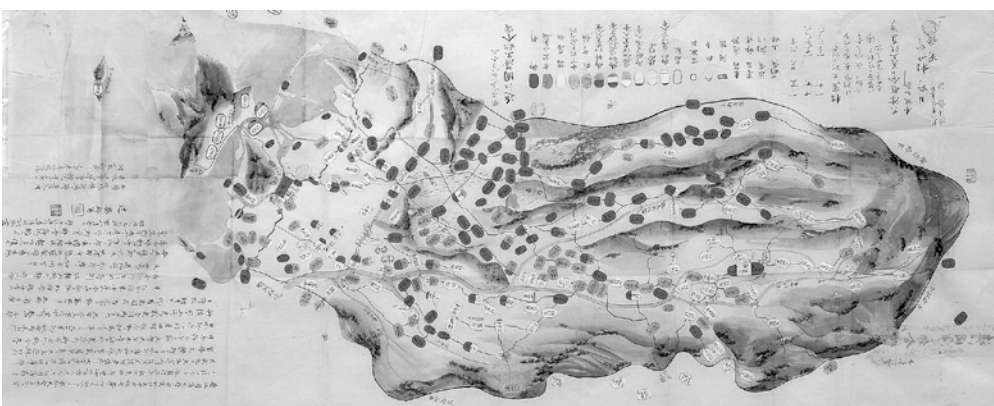
大字村井文書のなかに、明治2（1869）年に作成された「蒲生郡全絵図」が残されています。廃藩置県を進めるにあたり、明治新政府が各府県に提出を求めた「明治国絵図」の元となった貴重な郡絵図です。

絵図には、蒲生郡内の山野湖沼・道路・名所旧跡・町村名など、豊富な地理情報が描かれています。そして、この絵図の作図を担当したのが、何を隠そう村井の庄屋・辻六右衛門でした。六右衛門は、庄屋就任前に私塾の師範として数

蒲生郡絵図と辻六右衛門

学を教授し、また絵画も嗜んでいましたので、絵図の製作者として打って付けの人物でした。

江戸から維新期の日本の行政を下支えたのは、辻六右衛門に代表されるような、地域の村役人や文化人だったのです。



近江国蒲生郡全絵図（大字村井文書）